

人と人を繋ぐ医療技術等展開推進事業 ライチが実るベトナムで

国立国際医療研究センター 国際医療協力局

宮城 あゆみ

7月初旬にベトナムへ出張しました。露店やスーパーでは、枝ごと収穫されたライチが束になって売られていて、ライチが食べ頃の季節だそうです。食事先はもちろん、訪問先の関係機関でも、毎回会議室のテーブルには飲み物と一緒にライチが山のように積み、私たちをもてなしてくれました。帰国時には、お世話になった携帯会社のおじさんやバスの運転手さんからもおみやげにライチの束をいただきましたが、残念ながらフルーツは日本には持ち帰ることはできないので、現地在住の通訳さんや現地スタッフに引き取ってもらいました。ベトナムのライチは本当においしかったので、後ろ髪を引かれる思いでした。入国時に“ライチの食べすぎは体に悪いから気をつけて”とは言われたものの、短い滞在期間中に私が食べたライチの数は優に3ケタになると思います。

さて、今回の出張では、令和4年度医療技術等国際展開推進事業（以下、展開推進事業）¹のひとつで、国立国際医療研究センター（以下、NCGM）



中央に積み重ねられたライチを挟んで会議中

臨床工学部門の「行政機関との連携によるベトナム基準に則した医療機器の安全管理技術支援事業」（以下、ME事業）²の現地セミナー開催に伴う運営補助を行いました。私はふだん、この展開推進事業の事務局の一員として働いています。展開推進事業とは、厚生労働省の予算でNCGMが実施し、「日本の医療制度に関する経験の共有、医療技術の移転や高品質な日本の医薬品、医療機器の国際展開を推進し、日本の医療分野の成長を促進しつつ相手国の公衆衛生水準の予備医療水準の向上に貢献するための事業」です。2015年度から2021年度までに延べ96か国で234事業が実施され、延べ66,562名の医療人材が参加しました。なかでも、ベトナムで実施している事業数はもっとも多く、今回同行したME事業も、2017年度から継続して実施する事業のひとつです。日本の安全管理技術をベトナムに即した形で



現地セミナー

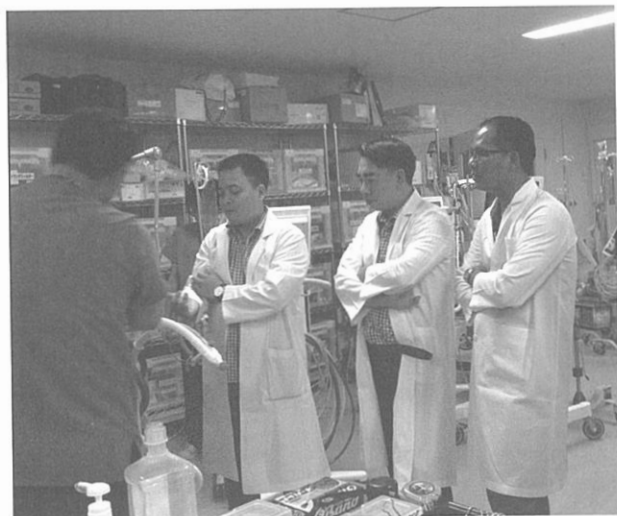
オンライン参加者向けにカメラを持つ事業責任者の小川さん（中央）とデモンストレーションをする横田さん（右側の女性）、研修員たちの真剣な様子

主要病院や関係機関に伝達・支援することで、ベトナム全土の医療機関への持続的な技術伝達を促し、医療機器管理・安全性に関する制度化に向けた支援や学術集会や協会設立による医療機器管理技術者の地位確立を目指しています。

私は2018年度と2019年度に展開推進事業の本邦研修にかかわる職務に就いており、海外の医療人材（以下、研修員）の訪日にかかる支援を行ってきました。往来も活発だった新型コロナ流行直前の2年間で、たくさんの研修員と接する機会がありました。特に事業数が多いベトナムは、研修員数も多かったため、ほとんどの研修員のことは忘れてしまいました。しかし2018年にME事業で来日した3名についてはとても印象に残っていました。

この3名とは、訪日前に提出されたレントゲン写真で肺に影が見つかって参加が危ぶまれたものの無事に来日したポーカーフェイスのAさん、休憩中にタバコを吸いに外に出て、帰りに近所の果物屋で買ってきたブドウを分けてくれたBさん、看護師のCさんです。

AさんとBさんは、訪問先のハノイの病院の医療機器管理室で働いていたので、再会を果たすことができました。Aさんは相変わらず淡々と働いていて、相変わらずヘビースモーカーのBさんは、今では医療機器管理室のトップになっていました。先述したように、各訪問先ではライチをふるまってくれるのですが、Bさんがトップの医療機器管理室だけは、山積みのライチの横にブドウも山積みになっていま



4年前の本邦研修

した。本当にブドウが好きなんですね。

さて、もうひとりの研修員、看護師のCさんですが、実は私が社会人生活で叱責してしまった唯一の人です。彼はベトナムに帰国する日、空港行きの集合時間に現れなかったのです。私も集合時間に間に合わないくらいで怒ったりしません。彼の場合は再三の注意喚起にもかかわらず、集合時間に現れなかったのです。彼を待っていてもAさんとBさんも乗り遅れてしまうので、研修監理員（通訳兼コーディネーター）はふたりを連れて先に空港へ、研修監理員から連絡を受けた私は、休日を返上して彼を迎えに行き、タクシーと一緒にバスターミナルに移動することになりました。なんとか空港行のバスに彼を押し込みましたが、こどもへのお土産として購入したランドセルを背負ったベトナム人の大人と、怒り心頭で彼が購入したウォシュレット便器や炊飯器をカートに積んで走る日本人の私が、混雑したバスターミナルで疾走する様子は、他の利用者にとってはさぞかし異様な光景だったことだと思います。

話を今回のベトナム出張に戻します。ハノイの病院では、医療機器管理室だけではなく、ICUの医療機器管理状況も見学させていただきました。しかし当日は、ICUのセンター長は残念ながら他の用事があって案内できないとのこと、その代わり信頼できるスタッフに案内を頼んでおいたからと言われました。私たちが待っているとその信頼できるスタッフこそ、バスターミナルでランドセルを背負って走ったCさんだったのです。そういえば彼はICUの看護師さんでしたが、まさかこの出張で再会するとは思ってもみませんでした。散々な印象だったので、私にとって彼は“仕事ができない人”だと勝手に思い込んでいました。でも、確かにその人なのです。挨拶する際にその話をすると、一瞬恥ずかしそうな顔をしたものの、その後のICUでの案内はなんと堂々と自信に溢れたことだったでしょう。実際のところ、彼が管理するICUでは、医療機器管理室以上に医療機器が整然と管理され、4年前の本邦研修で学んだことが現場で十分に活かされていたのです。

彼ら3名が4年後にそれぞれ活躍している姿を見ることができたことは、ほんの一部ではあるものの本ME事業にかかわれたことをありがたく思いまし

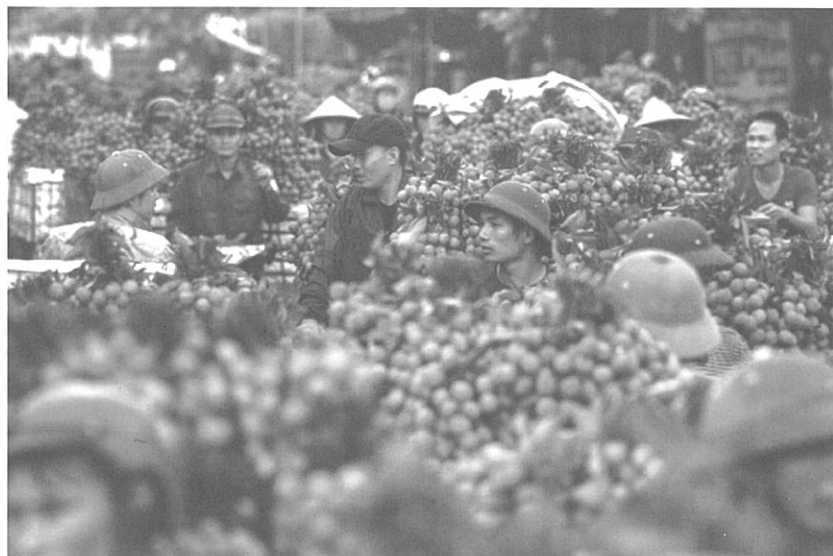
た。また、単に日本の技術を展開するのではなく、現地の実情に合わせて伝達し、それを研修員が現地に持ち帰り、現地で持続的な技術として実践する、それを見ることができたのは胸に迫るものがありました。今回の訪問時にも、彼らが4年前に学んだ内容を実践していることやアップデートしていること、一方でまだ実現できていないことや今後の方向性などの議論がなされ、それを今回の出張で実際に見ることができたのは、事務局での日々の業務へのモチベーション向上にも大いに役立ち、貴重な機会をもらえたことに感謝しています。

本事業を継続して実施できているのは、事業責任者の本事業に対する熱意の賜物であることは間違いありません。コロナ対応で通常業務も多忙を極める中、コロナ禍でもオンライン研修に切り替えて事業を継続することは、想像できない苦労があったことと思います。もちろん、本事業を継続して実施できるのは、日本側の努力だけではありません。初年度から一貫して通訳を担当してくれるDungさん、定年後も我々が乗るバスを原付で先導して各訪問先に同行してくれる元医療機器管理室長で本邦研修1期生のVanさん、ふたりの功績がとても大きいことは、今回はじめて出張に同行させてもらった私から見ても明らかでした。また、ふたり以外にも、これまで本事業にかかわってきたすべての人たちの力添えによるものであることは間違いありません。

国際展開推進事業は、「日本の医療を世界へ」が

キャッチフレーズです。しかし、単に日本の技術展開を推進するだけではありません。現地のニーズに合わせて、現地の人と協力して事業を展開していくことの大切さを実感しました。時には、現地の技術を日本に応用することもあるはずですが、まさに、「日本及び相手国の双方にとって好循環をもたらす」ことに繋がっていくのだと思います。特に今回の現地セミナーでは、ベトナム全土から研修員が一同に集うという以前のセミナーが再開できただけでなく、オンラインによる参加も可能となり、人と人がハイブリットで繋がるこれからのセミナーの好例を見ることができました。この展開推進事業が円滑に進むよう、私はこれからも日々の業務に邁進する所存です。今回、それに気づかせてくれた事業責任者、出張する機会を与えてくれた上長、出張中の業務を一手に引き受けてくれた同僚、ベトナムのみならず、そしておいしいベトナムすべてに感謝しています。ベトナムではどの食事もおいしく、ヘルシーな食材でどれだけ食べても罪悪感がありません。まだまだ食べてみたいものがたくさんあります。でも次に行く機会があるとしたら、また同じ季節、ライチがおいしい7月に再訪できたらうれしいです。

- 1) <https://kyokuhp.ncgm.go.jp/activity/open/index.html>
- 2) https://kyokuhp.ncgm.go.jp/activity/open/r4pdf/19_NCGM_ME.pdf



生産者がライチを出荷する美しい風景 ©vietnam times